

二週間ほど間が空きましたが、「信仰の継承」のシリーズを続けていきます。私たちは、これまでに信仰の継承が、「(主の) 約束によること」、また「信仰によること」を見てきたわけですが、今日はそれが「悔い改めによること」を見ていきます。ただ主の一方的なあわれみ、その恵みによって救われた私たちは、主の救いが「すでに与えられたもの」であると共に、「いまだ完成していない」という緊張関係の中にあるゆえに、この地上において、日々霊の戦いを経験するわけです。

その中で、主の御霊により頼み、みことばに聴き従うことが欠かせないわけですが、そこに悪魔の存在があるゆえに、また私たちのうちに自己中心といった罪が残っているゆえに、救われた後も私たちは、主に対して不信仰、不従順といった罪を犯してしまうことがあります。けれども主は、それをご存知で、私たちを選び、召し出し、ご自分の子どもとして下さいました。それは、私たちが神様と「父と子の関係」に入れられることで、もはや罪が、私たちを神様から遠ざけるものではなく、むしろ、神様に近づけるものとなるため、つまり、主への悔い改めによって、私たちがいよいよ主に自ら近づく者となるためです。

ですから、悔い改めは、未信者が主イエスを信じる時に行うだけではなく、信じた後も、すべての信仰者が、その救いの完成に至るまで、日々必要とするものです。それゆえに、悔い改めは、不信仰の表れではなく、むしろ信仰の表れ、それは私たちのうちに主への信仰があることの証といえます。そのことを心に留めつつ、今日の「悔い改めによる信仰継承」ということを見ていきたいと思えます。

ご存知の方が多いと思いますが、今日の箇所は、ダビデの悔い改めが記されているところです。それは、彼が、バテ・シェバとの姦淫の罪を犯し、またその夫ウリヤを殺害した後、預言者ナタンによって罪を責められ、悔い改めたときのものといわれています。もう一度、お読みします。14-17節「神よ。私の救いの神よ。血の罪から私を救い出してください。そうすれば、私の舌は、あなたの義を、高らかに歌うでしょう。15 主よ。私のくちびるを開いてください。そうすれば、私の口は、あなたの誉れを告げるでしょう。16 たとい私がささげても、まことに、あなたはいけにえを喜ばれません。全焼のいけにえを、望まれません。17 神へのいけにえは、砕かれた霊。砕かれた、悔いた心。神よ。あなたは、それをさげすまれません」。

ダビデが、これらの罪を犯した時、彼はすでにイスラエルの王となっていました。イスラエルの国は、彼の指揮のもと、いよいよ繁栄し、強くなっていったのです。ですから、人間的な意味で、誰もダビデを咎める人、彼をその罪ゆえに、王位から退けることのできる人はいませんでした。そのことをダビデも知っていたので、彼は権力を使い、自分の罪を隠そうとしたのです。ところが、その心をご覧になり、ダビデをお選びになった神様は、それを見過ごされませんでした。主は、預言者ナタンをダビデのもとに遣わし、貧しい者の子羊を奪い取った富んでいる者の譬えをもって、ダビデの罪を責められたのです(サムⅡ12章)。

今、英語部では「十戒」を見ていますが、神様は、その中で「姦淫」と「殺人」を罪として明確に定めておられます。ですから、たとえダビデであっても、それは赦されるものではありませんでした。そして、そのことは当然、ダビデ自身も知っていたはずです。彼ほど心から神様を愛し、その御声に聴き従った人は多くないからです。にも関わらず、民の模範となるべくはずの彼が、王国の絶頂期を迎えた時に、このような罪を犯してしまったのです。王国の確立によって、彼のうちに高慢や油断といった心が生じたからだと言えらると思えます。そして何よりも、ダビデもまた、私たち同様、罪の中に生まれた罪人に過ぎなかったということです。それほど罪の力は大きく、恐ろしいものといえます。

では、その罪の結果、どうなりましたか？バテ・シェバが生んだ子は、死んでしまうのです。また主は、ダビデの家から剣が絶えないこと、あらゆる災いが起こることを語られました。けれども、主は、ダビデの罪を見過ごされたのです。それゆえに、彼がイスラエルの王位から退けられることはありませんでした。そして、やがては、バテ・シェバとの間に生まれたソロモンがその王位を引き継ぐことになるのです。

でも、どうですか？ご存知の方も多いと思いますが、ダビデの前のイスラエルの王、つまり、初代の王サウルの時は、神様は彼が犯した罪ゆえに、彼を王位から退けられたのです。言うまでもなく、ダビデはサウルの息

子ではありません。皆さん、なぜ神様は、サウルに対してはその罪ゆえに、彼を王位から退け、ダビデに対しては、彼に罪の報酬を刈り取ることはさせても、彼を王位から退けられなかったのでしょうか？サウルの罪が、ダビデの罪よりも重かったからですか？つまり、サウルの罪が、ダビデの犯した姦淫や殺人よりも大きかったから、主はサウルを退けられたのでしょうか？

サウルの罪を見てみましょう。まず一つ目は、ペリシテ人との戦いにおいて、預言者サムエルの来るのが遅れたのを理由に、彼が自分勝手に全焼のいけにえと和解のいけにえをささげた、ということがあげられます（1サム13:8-14）。そして、もう一つは、アマレク人に対して、主は「すべてのものを聖絶せよ！」と命じられたにも関わらず、民と彼は、その中の最も良いものを惜しんで、すべてを聖絶しなかった、ということです（1サム15:3、9）。つまり、どちらも主の御声に聴き従わなかったという不従順の罪が、彼の犯した罪です。

主は、そのことのゆえに、彼にこう語られました。Iサム15:22-23「主は【主】の御声に聞き従うことほどに、全焼のいけにえや、その他のいけにえを喜ばれるだろうか。見よ。聞き従うことは、いけにえにまさり、耳を傾けることは、雄羊の脂肪にまさる。23 まことに、そむくことは占いの罪、従わないことは偶像礼拝の罪だ。あなたが【主】のことばを退けたので、主もあなたを王位から退けた」。

このようにサウルは、主の御声に聴き従わなかった、つまり、彼が主のことばを退けたので、主もまた彼を王位から退けられたというのです。そして、そのことは皆さんも理解いただけると思います。主に対する不従順の罪は、決して小さなものではないのです。では、ダビデの罪はどうですか？彼もまた、姦淫と殺人が罪であることを知っていたわけですから、彼も同じように不従順の罪を犯したことになるのですか？それゆえに、彼もまた主のことばを退けたとあって、王位から退けられてもおかしくなかったと思うのです。でも神様は、サウルを退け、ダビデは退けられませんでした。なぜですか？

そのことは、主に罪を責められた後、彼らがどのように応答したかにヒントを見れるように思います。まずサウルは、サムエルに責められた時、このように応えました。Iサム15:24「私は罪を犯しました。私は【主】の命令と、あなたのことばにそむいたからです。私は民を恐れて、彼らの声に従ったのです」。そしてダビデは、ナタンに責められた時、このように言いました。IIサム12:13「私は主に対して罪を犯した」。この時点では、どちらも自分の犯したことを罪と認めるだけで、そこには差を見ることはできません。

ところが、その後です。サウルはこう言いました。Iサム15:30「私は罪を犯しました。しかし、どうか今は、私の民の長老とイスラエルとの前で私の面目を立ててください。どうか私といっしょに帰って、あなたの神、【主】を礼拝させてください」。確かにサウルは、ことばでは自分は罪を犯したと言っています。けれども、すぐその後、彼は神様ではなく、イスラエルの長老と民とに受け入れられることを考えているのです。つまり、彼にとっては、神様よりも、民の方が大事でした。もっと言うと自分のことが一番大切だったのです。ですから、彼は「主を礼拝させてください」とは言いました。でも彼にとっての主とは、サムエルの神であって、彼自身の神ではなかったのです。

一方、ダビデは、このサウルのようにではありませんでした。理由が何であれ、彼が犯した罪は、間違いなく罪です。彼が王であったからといって、決して軽く捉えられて良いものではありません。でも、それを犯してしまった以上、もはや過去には戻れないのです。何をどうしたとしても、なかったことにはできません。ダビデは、そのことに気づかされた時、つまり、自分の犯した罪の重みを知った時、ただ主にあわれみを請うたのです。少し長いですが、そのまま聖書からダビデの悔い改めについて見ます。

51:1-13「神よ。御恵みによって、私に情けをかけ、あなたの豊かなあわれみによって、私のそむきの罪をぬぐい去ってください。2 どうか私の咎を、私から全く洗い去り、私の罪から、私をきよめてください。3 まことに、私は自分のそむきの罪を知っています。私の罪は、いつも私の目の前にあります。4 私はあなたに、ただあなたに、罪を犯し、あなたの御目に悪であることを行いました。それゆえ、あなたが宣告されるとき、あなたは正しく、さばかれるとき、あなたはきよくあられます。

5 ああ、私は咎ある者として生まれ、罪ある者として母は私をみごもりました。6 ああ、あなたは心のうちの真実を喜ばれます。それゆえ、私の心の奥に知恵を教えてください。7 ヒソプをもって私の罪を除いてきよめてください。そうすれば、私はきよくなりましょう。私を洗ってください。そうすれば、私は雪よりも白くなりましょう。8 私に、楽しみと喜びを、聞かせてください。そうすれば、あなたがお砕きになった骨が、喜ぶことでしょう。9 御顔を私の罪から隠し、私の咎をことごとく、ぬぐい去ってください。

10 神よ。私にきよい心を造り、ゆるがない霊を私のうちに新しくしてください。11 私をあなたの御前から、投げ捨てず、あなたの聖霊を、私から取り去らないでください。12 あなたの救いの喜びを、私に返し、喜んで仕える霊が、私をささえますように。13 私は、そむく者たちに、あなたの道を教えましょう。そうすれば、罪人は、あなたのもとに帰りましょう」。この後、今日の箇所が続くわけですが、ここまでにします。

皆さん、罪に対するサウルの応答とダビデの応答の違いがおわかりいただけでしょうか？この世の一般的な感覚からすると、「どんな罪を犯したのか？」ということが、それが赦されるかどうかの判断基準になるかも知れません。ですから、サウルとダビデの場合も、どちらの罪の方が大きかったのか、ということに心が奪われることもあると思うのです。もちろん、私は「どの罪も、みな同じだ」と言っているのではありません。でも、神様の前では、サウルの罪も、ダビデの罪も、間違いなく罪であって、それらは主のさばきの対象であったということです。そして当然のように、彼らは自分が犯した罪の代償を支払うことになったわけです。

ところが、それで彼らがふたりとも、神様に受け入れられたわけではありません。サウルは退けられ、ダビデは受け入れられたのです。サウルは、自分自身を愛し、自分の目に叶うことを求め、ダビデは、主を愛するゆえに、主の目に叶うことを求めたからです。ここに大きな違いがあります。サウルは自分の罪ゆえに、心砕かれることはありませんでしたが、ダビデは心砕かれ、その悔いた心をもって主の前に出たのです。その砕かれた、悔いた心こそ、主が喜ばれるいけにえであると、彼が知っていたからです。

16-17 節「たとい私がささげても、まことに、あなたはいけにえを喜ばれません。全焼のいけにえを、望まれません。17 神へのいけにえは、砕かれた霊。砕かれた、悔いた心。神よ。あなたは、それをさげすまれません」。ここでダビデが言わんとすること、それはどんないけにえも主は喜ばれない、ということではありません。もしそこに罪を悔いる心、罪によって砕かれた心がなければ、形だけの動物のいけにえをもって、それを悔い改めとすることは意味のないことだということです。なぜなら、主は、私たちの心の中をすべてご存知だからです。ですから、主は、ことばや形だけで敬う者ではなく、心から主を敬う者、つまり、罪人としての自分と自分の罪を嘆き、ただ主に救いの望みを置く者にあわれみをかけて下さる、罪から救って下さるのです。

どのようにしてですか？御子イエスの十字架の死、その贖いの血潮によってです。神様は、この救い主についてダビデにこのように約束しておられました。Ⅱサム7:12-13「あなたの日数が満ち、あなたがあなたの先祖たちとともに眠るとき、わたしは、あなたの身から出る世継ぎの子を、あなたのあとに起こし、彼の王国を確立させる。13 彼はわたしの名のために一つの家を建て、わたしはその王国の王座をとこしえまでも堅く立てる」。神様が、ダビデに約束された彼の身から出る世継ぎの子、つまり、神様の名のために一つの家を建て、その王国の王座をとこしえまでも堅く立てるといわれたのは、実に主イエスのことでした。ですから、主イエスが来られ、彼に救いの望みを置いた人たちは、主イエスのことを「ダビデの子」と呼んだのです。

信仰の継承は、罪を犯さない人ではなく、ダビデのように、へりくだって自分の罪を認める人によって、もっといって、自分が罪人であることを認め、罪と滅びから救うために、この世に来られ、十字架にかかり、贖いの死を遂げた下さった主イエスを救い主と信じる人によって、同じように、主に救いの望みを置く人へとなされていきます。あなたはその人ですか？今日あなたは、主のみことばの前に、自分が罪人に過ぎないことに気付かされていますか？でも同時に、そんなあなたのために、神様が御子の十字架の死を通して成し遂げて下さった救いのわざのゆえに、主への感謝と喜びに満たされていますか？そして、その喜びのゆえに、あなたが主にささげるいけにえは、主のために何かをすること以上に、あなたの心、あなた自身ですか？神へのいけにえ、それは砕かれたたましい。砕かれた、悔いた心です。主は、それをさげすまれません。